

新潟脳神経研究会特別例会の御案内

日 時：平成30年3月2日（金）17:30 ～ 18:30

場 所：脳研究所 1F 検討会室

身体像の錯覚からみた自閉 スペクトラム症の特徴

和田 真 先生

国立障害者リハビリテーションセンター研究所
脳機能系障害研究部 発達障害研究室長

自閉スペクトラム症でみられる様々な障害特性の背景には、特有の感覚情報処理特性が関与する。例えば自閉傾向の高い実験参加者は、触覚と固有感覚が結びつきやすい（Wada et al., 2014 Sci Rep; Ide & Wada, 2017 Front Hum Neurosci）。ラバーハンド錯覚では、参加者の手と模造品の手を筆で同時に刺激する。すると、多くの参加者は、模造品の手を自分の手のように感じる（Botvinick & Cohen, 1998 Nature）。我々は、この錯覚とオキシトシンが関連する可能性を発見し、自閉傾向の高い実験参加者は、この錯覚を感じにくいことを見出した（Ide & Wada, 2017 Front Hum Neurosci）。さらに、ラバーハンド錯覚に近い現象がマウスにも生じることを発見し、「ラバーテイル応答」と名づけた（Wada et al., 2016 J Neurosci）。自閉症モデルマウスの1つである Caps2 KO マウスでは、この現象が生じにくいことがわかり、c-Fos を用いた免疫染色からは、後部頭頂皮質の関与が示唆された。今回は、これらの研究を紹介し、障害特性との関連についても論じていきたい。

どうぞ奮ってご参加ください。

（担当：システム脳生理学分野）
新潟脳神経研究会幹事代表：那波宏之